
Book of tha darkness

キプロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Book of th a d a r k n e s s

【Nコード】

N O 1 6 4 L

【作者名】

キプロス

【あらすじ】

自作ホラー作品からなる短編小説集。

Episode・1 音

深夜、私は暖かな布団に潜り込み、眠りにつこうとした。睡眠は多くの人間にとって、非常に大事なもののだが、上に住まう住人は訳が違った。

マンションに住む中で一種の障害だろうか……。私の上の部屋からは、爆弾が落ちたような音と衝撃が響き渡っていた。

上には1人の大学生が住んでいる。

そして、夜な夜な私や他の住民が寝ようとすると、仲間を呼んで馬鹿騒ぎをするのだ。

「もう止めてくれ!!」

私は悲鳴を上げた。このままでは、頭がどうにかなくなってしまう。どうすればいい?この悪夢を終わらせる為には……。

その考えは、すぐに解消された。

ある日、私は右手に血だらけの包丁を持ち、上の住人の部屋にいた。これまで爆音を上げ、眠りを妨げていたCDプレーヤーは押し潰されてバラバラになっている。

私は何をした?返り血に染まったパジャマを見る限り、大変な事態になっている事は悟っていた。

目の前の床は、血の海と4人の死体で埋め尽くされていた。

悪夢だ。

これは悪夢だ。

でも、悪くない悪夢だ。

気付けば私は山の中で穴を掘り、4人の人間を埋めていた。
永遠に爆音を聞かず、心地良い眠りにつけることに胸躍らせて……。

次の日の夜。私は暖かな布団の中にいた。
これで寝ることが出来る。

そう自分に言い聞かせ、目を閉じた。

…爆音が聞こえる。

それは昨日消したはずのものだ。

だが、それだけではなく、悲鳴も聞こえていた。

私は耳を塞ぎ、眠ろうとしたが無駄だった。

耳を塞いでも聞こえてくる。

一週間…一ヶ月経つてもその悲鳴と爆音が聞こえ続けた。

この悪夢から解放されたい……。

そんな心情が胸いっぱいに溢れ出し、私はついに立ち上がった。

漆黒の部屋を走り抜け、キッチンへと向かった。

全てを終わらせる為…全ての始まりを作った包丁を使い、両耳を削ぎ落とす為に。

そうすれば…二度と音は聞こえなくなり、眠りにつけるだろう……。

Episode・1 音（後書き）

新たな小説を書かせて頂くキプロスです。

自作短編小説を中心としており、上手く書けるかどうか分かりませんがよろしくお願いします。

Episode・2 アバター（?1）

サイト上で自由自在に変える事が出来るもの“アバター”
私は今日、ついに自分のアバターを作った。

三つ編みの髪にし、可愛い服を着させた。
理想的な自分の分身。それを簡単に作れるというのは最高だ。
携帯の画面には、愛らしく動き回るアバターの姿が映っている。

私の分身の周りには、何十人というアバターが近付き、挨拶や励まし
の言葉を掛けてくれる。
現実とは全然違う。

私は寝る暇も惜しんでアバターを動かし続けた。

次の日、私は眠りから目覚めた。が、その光景はいつもとは違っていた。

ここは？どこなの？

私の目の前には、見た事の無い家が映っていた。
一部がドット化というとおかしいが、何か風景がぎこちないのだ。
眼前に広がるその光景は、かつて見たことがあった。

“アバタータウン”

そつだ。昨日私が初めて見た光景だわ……。
小さな足でチョコチョコと歩き、私はペラペラの扉を開けた。

扉の先には、アバター達がいた。
途方も無い程、大勢のアバター達が互いに向き合い、相づちを行っ

ていた。

何が起こってるの！？ここから出なきゃ！

私は焦り、空を見上げた。

空には、不気味な笑みを浮かべた私がいた。

引きつった顎は歯茎を露にし、その瞳は不気味に光っていた。

Episode 3

アバター（?2）

ある日、パソコン画面を見てみると、記憶に無いアバターがいた。作った記憶の無い、正体不明のアバターだ。黒い短髪という髪型と、白色のＴシャツを着ているが、僕は作った記憶が無い。

このアバターは何だ？

頭の中で沸き起こる不安と恐怖。

意味の分からない衝撃に襲われ、両手は震えていた。

訳の分からないまま、僕はパソコンの電源を停止した。

次の日、あのアバターの服が変わっていた。

緑色のＴシャツに変わっている。

誰だ？一体誰がこんな事を……。

僕は見えぬ恐怖を覚え、またパソコンの電源を切った。

その夜、眠れぬ僕は気分を変える為、パソコンへと向かっていた。事件が起きたのはその時だった。

パソコン画面の光源により、怪しげな光が漆黒の闇の一片を照らしている。

そのパソコンの前には、もう一人の自分がいたのだ。

「よう！元気？」

もう一人の自分は笑顔で僕に挨拶してくる。

思わず気を失いそうだったが、僕はなんとかそこに踏みとどまった。

「……誰だ？」

「誰だって……俺はお前だよ。“ドッペルゲンガー”って奴さ」

ド…ドッペルゲンガー？

あまり知識の無かった僕だったが、その存在ぐらいなら知っていた。それを知ってしまうと、僕は妙な気分を覚えた。

自分…の分身が“アバター”…つまり分身が分身を作っている。なんとも滑稽な光景で、僕は思わず笑った。

それから数日後にあんな目に遭うとは思わなかったけど……。

Episode 4 核開発

アメリカとソ連が睨み合う冷たい戦争『冷戦』

その頃、両国は核兵器開発に夢中だった。

アメリカのメリーランド州にとある男性核物理学者がいた。

彼は核兵器の開発に携わっていて、その頃は原爆の開発を行っていた。

度重なる高濃度の放射汚染にもめげず、彼は核物質との接触を続けていたのだ。

そんな時、ある事件が起こる。

突然「原子の衝突を！」と絶叫した彼は、原爆を爆発させようとした。

途中で彼は止められたものの、その後彼は精神病院に送られた。

それから数カ月後、彼の娘が見舞いに行った。

だが、彼の姿は無かったという。

彼の娘は何とか手がかりを掴もうと、彼の寝ていたベッドのシーツや部屋の備品を解析しようと自分の研究室に持ち帰った。

そこからは多量の放射能が検出されたという。

違和感を覚えた娘は、さらに詳しい調査を行う為、電子顕微鏡でシーツを覗いた。

その電子顕微鏡に目を近づけた娘は、驚愕した。

電子顕微鏡には、父親の顔をした原子が映っていたという……。

『人面原子』

後にこの噂話が日本に伝わった時、一部の人はこう呼んだ。

嘘か本当か。それは誰も知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0164/>

Book of tha darkness

2010年10月10日15時18分発行